

所属 高知県立城山高等学校
氏名 濱田 志乃
RG SH5

【アクション・リサーチⅠ】

- 1 研究の背景
「絵金まつり」や「どろめまつり」の町、赤岡町にある全校生徒124名（5月1日現在）の小規模校である。明るく人なつこい生徒が多いが、明確な目的意識を持つことができないために、学習面で課題を持っている生徒が多数を占める。今回対象に選んだクラスは、授業中の反応もあり、質問も活発に出るが、体調や気候により集中力に波がある。
- 2 リサーチクエスチョン
集中力を持続させ、生徒に達成感を持たせるにはどうすればよいか。
- 3 予備調査
 - (1) 授業観察の結果
概ねまじめであるが、気分が乗らないときは、「今日はやめよう」と訴えたり、私語を始めたたりすることもある。教員に対しては好意的で、課題への取組もよいことが多い。
 - (2) 生徒の英語学習意識（アンケート形式で実施）
英語に対する嫌悪を示してはいないが、進学するための手段でもなければ、外国人とコミュニケーションすることも特に望んでいないということがわかった。
 - (3) 文献研究
「同時通訳の神様」として知られる國弘正雄氏は「使える英語を身に付けるには読んで内容がわかる英文を自分の身体が覚え込むまで、繰り返し声を出して読んでみる。音読、そして筆写という、いわば英語の筋肉トレーニングを自分自身でやってみて、初めて英語の基礎回路が自分のなかに構築できるのです。」と述べ、「只管朗読・只管筆写」が英語上達の近道だと言っている。繰り返し音読することで、英語を運動記憶として使えるようになる。筆写は、手を動かして書き写しながら身体に覚え込ませるために行うと言っている。また、瀧口優氏も「言語材料の指導としては、特に英語が苦手な生徒には単純化してそれを繰り返すことが重要である。一定の範囲ができるところまで到達すれば、それだけで大きな自信となるからである。」と述べている。
- 4 仮説の設定
仮説1 音読・筆写をすることにより、主体的に学習するようになるのではないかな。
仮説2 音読・筆写の重要性をおりにふれ伝え、生徒を励ませば、熱心に取り組むだろう。
仮説3 小テストの実施や WPM をはかることで音読・筆写の効果を生徒が実感し、やればできるんだと思うようになるだろう。
- 5 計画の実践
 - (1) 講義スタイルではなく、教科書の英文を身体で覚え込むまで繰り返し声に出し、書き写させる。
教科書の文法や語法の説明、簡単な和訳のあとで、読みの練習をする。CD を何回も聞いて、リズムやイントネーションに気をつけて、感情を込めて読めるようにさせる。
 - (2) 上手に読めたときには、間髪入れずほめる。生徒が飽きないように、テンポ良く進める。
音読・筆写を続けることの大切さを説き、量をこなすのではなく、少しずつ毎時間行う。
 - (3) 音読・筆写の効果がわかるような練習問題や小テストを実施する。WPM を毎回記録し、前回より伸びていることを確認させる。
- 6 実践の結果
 - (1) 筆写のスピードも徐々に上がり、短時間でこなせるようになった。特に指示しなくても、CD についてシャドーイングをするなど、主体的な取組が見られた。
 - (2) 比較的容易な英文を用い、それを繰り返すことで英語が自然と出るようになった。
 - (3) WPM 計測結果 生徒 A 126→140→225 生徒 B 112→126→132
アンケートにより、音読筆写の学習方法は生徒にとって効果的であるという回答を得た。
- 7 結果の検証
 - (1) 読む力は以前より向上した反面、スペリングについては手つかずであり、英語は出てくるが書くことができないということがたびたびあった。
 - (2) 生徒も人間関係で悩むこともあり、そんなときは授業への意欲が落ちるようである。勉強を教えるだけではなく、教師自身も自分の人生観を語ることで、生徒との関係が深まり、それがまた授業の改善につながるのではないだろうか。

【アクション・リサーチⅡ】

- 1 リサーチ・クエスチョン
音読筆写を取り入れながら、つづりの定着を図るにはどのようにすればいいか。
- 2 予備調査
 - (1) 生徒の自己評価

面接により、授業について思っていること、英語に対する意識、苦手なことについて聞き取りを行った。英語を読むのは楽しいが、つづりを覚えることが一番苦手だという。

(2) 文献研究

中嶋洋一 『英語好きにする授業マネジメント30の技』(2004) 明治図書
三浦孝、弘山貞夫、中嶋洋一 『だから英語は教育なんだ』(2002) 研究社
松香洋子 『英語、好きですか』(2004) 読売新聞社

3 仮説の設定

仮説1 音読筆写を続けることで、読むこと、書くことがスムーズにできるようになるだろう。
仮説2 スペリング指導を重視した活動をすれば、つづりが自然と身に付くだろう。
仮説3 英語の発音とつづりが結びつけば、語彙の定着が高まるだろう。
仮説4 英語を何回も聞かせ、音読をさせることで理解が深まるだろう。

4 計画の実践

- (1) 音読・筆写を継続する。教科書の英文を身体で覚え込むまで繰り返し声に出し、書き写させる。WPMを計算し、練習すれば結果が良くなることを実感させ、励ます。
- (2) 単語を「よく見て」「音読しながら書く」活動をさせる。
- (3) フォニックスのルールを簡単に説明し、つづりを見れば発音できることに気づかせる。
- (4) CDの音声や教師の音読をくりかえし聞かせる。教科書の英文を使って、ディクテーションをさせる。

(例)	レベル A	Are you looking () an unusual trip? Then you should () the Ice () in Sweden. It is () only during the winter ...
	レベル B	Are you () for an unusual trip? () you should visit the Ice Hotel in Sweden. It is open () during the winter...
	レベル C	Are you looking for an () trip? Then you () visit the Ice Hotel in (). It is open only () the winter ...

ペアでのシャドーイング練習。

センスグループごとにペアで英日通訳練習。慣れたら日英通訳練習。

(例)

生徒 A :	It is open
生徒 B :	それはオープンしています
生徒 A :	only during the winter
生徒 B :	冬の間だけ・・・

5 実践の結果

(1) WPMの結果

生徒	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
1回目	83	109	186	162	149	124	166	100	68	148	148	82	109	146
2回目	109	126	186	177	162	134	179	113	98	186	182	82	121	155

(2) つづりと空所補充に関する問題の正答数 <2学期期末試験(英語Ⅱ)> つづり6問、空所12問

生徒	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
つづり	4	3	4	4	6	6	4	4	4	5	6	6	4	5
空所補充	10	10	12	10	10	12	12	9	12	12	12	12	10	12

(3) アンケートの結果(14名)

	音読筆写	シャドーイング	同時通訳	フォニックス説明
効果的である	11	7	10	11
効果がない	0	0	1	1
どちらともいえない	3	7	3	2

6 結果の検証

2学期は、1学期の音読筆写の取組に加え、変化のある繰り返し練習を通して、英文を定着させることを目的に授業を行った。クラスの大部分の生徒がまじめに取り組み、読みの練習をしていくうちに、WPMの結果も向上した。

定期テストの成績はあまりよくないが、読みが得意な生徒が2学期期末テストで良好な結果が出ていて、何回も繰り返して読み、書くことの効果を実感した。

シャドーイングは「難しい」という意見があった。そのために、「効果がない」というアンケート結果が出たと思われる。英語が苦手な生徒が受け入れられるように、授業の中でどう取り入れるかが問題である。

7 成果と今後の課

<成果> つづりと発音についての説明に対して、「これは巻き舌だから r やね」と生徒なりに納得した様子が見られた。

昨年度は、語法の説明が中心になっていたが、今年度は生徒の自主的な活動ができるようになった。1学期に音読筆写を行ったとき、比較のおとなしい生徒が多いクラスでは、恥ずかしがってしまって、ほとんどペアでの音読ができなかった。2学期の行事を通じて連帯感が出てきたためか、ペアで協力して取り組めるようになった。

<課題> 1つの教材をいろいろな角度から練習して、知らず知らずの間に英文が記憶に残るように指導することと、教室の中で生徒がお互い助け合うことに留意して授業を行った。うまくいくときはいいが、教室がざわついてしまうときがあり、授業の組み立てを考える必要がある。

学習意欲は自分が上達していると自覚したときに生まれると言われる。英文がすらすら読めるようになった、英文が前から意味がわかるようになったという実感が持てるようにしていきたい。